22　紫雲霊桐鳳凰瑞祥之図　桂田湖城　一幅

絹本金泥
本紙一四二・二×五六・六
昭和三年（一九二八）

昭和の大礼を祝って献上された本図は、桐に鳳凰を取り合わせた典型的な吉祥の画題であるが、何よりも驚かされるのが、鳳凰も桐も棚引く雲もすべて細かな文字の集合で表されている点である。文字は「聖壽」「萬歳」の二通りが繰り返し用いられ、一文字の大きさは小さいものはわずか一、二ミリに過ぎない。附属の献上書によれば、桐の部分に二万四千字、鳳凰を描くのに二万四千字、そして瑞雲に四千字を用いたという。

さかのぼれば室町時代にはすでに梵字や経文の漢字を書き連ねて図像を表す仏画の作例があり、江戸時代半ばになると実に十万字を超える経文の文字を微細に重ねて尊像を表す加藤信清（一七三四～一八一〇）のような画家も登場する。いずれにしてもこうした文字絵による仏画は、仏教に対する信仰心の篤さを表現すべく行き着いた描法と言えよう。また本図も濃紺に染めた絹地に金泥で描く点は、紺色に染めた料紙に金字あるいは銀字を記した経文を想起させるなど、仏教美術との共通点が多い。若き天皇による昭和という新しい御代を迎える喜びと祝意の気持ち、そしてその尊崇の想いをいかにして表現するか思案した結果、仏画から着想して並々ならぬ時間と労力を要する文字絵の手法がとられたのだろう。

本図はおそらく別紙に筆で同寸の下書きをしたと思われる。桐の幹部分などは肥痩のある輪郭線を表すべく、文字を柔軟に伸縮させている。鳳凰の尾の流れるような筆線も文字の一画一画の払いを調整することで巧みに表現している。また、金泥の色味や濃淡にも変化をつけ、絵画としての完成度も高く、作者の基本的な技術の高さがうかがえる。作者の桂田湖城（一八六五～？）は、現在の滋賀県に生まれ幼くして京都に出て、十八歳より今尾景年、深田直城に師事した画家である。後に兵庫県西宮市に移って作画活動を行ったことで知られている。なお、本図は尼ヶ崎市在住の木原丑松より献上された。

部分

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

珍品ものがたり
三の丸尚蔵館展覧会図録No.58

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十四年七月二十一日発行
© 2012, The Museum of the Imperial Collections